

いま、語りつぐ

平和への願い XVII

「平和を願う市民のつどい」



2021年度 平和を願う市民のつどいの様子

宝 塚 市

発行にあたって

我が国は戦後 77 年目を迎えました。幸いにもこの間、我が国には戦争がなく平和な社会が続いています。しかし、この平和が、未来永劫続くという保証はどこにもありません。

宝塚市は、平成元年（1989 年）3 月 7 日に「非核平和都市宣言」を行い、平成 15 年（2003 年）9 月 19 日には「宝塚市核兵器廃絶平和推進基本条例」を施行し、これらの理念、規程に基づき、戦争や核兵器のない平和な社会の実現を願って、市民の皆様とともに毎年様々な平和事業を行っています。

本冊子では、様々な平和の催しの中から「平和を願う市民のつどい」として令和 3 年度（2021 年度）に実施した写真家でジャーナリストである國森康弘さんの講演についてまとめました。

國森康弘さんから「写真が語るいのちのバトンリレー ～被災地、紛争地、在宅看取りの現場に想う～」と題して、東日本大震災での出来事、紛争地での出来事、滋賀県や東京都で出会ったご家族を例にいのちの在り方について写真を交えながらご講演頂きました。

本冊子作成に当たり、國森康弘さんのご協力に心から感謝申し上げます。

今年 1 月に国連において核拡散防止条約の再検討会議が開催される予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大などを理由に 8 月に再延期となってしまいました。しかし、1 月 3 日に中国・フランス・ロシア・英国・米国の首脳が核戦争の防止および軍拡競争の回避に関する核兵器 5 か国首脳による共同声明を史上初めて発表しました。この共同声明の精神を踏まえて、核兵器廃絶に向けて着実に歩みを進めていかなければなりません。

新型コロナウイルス感染症の再拡大など、先が読めない世界情勢の中、今一度原点に立ち返り、核兵器のない平和な世界の実現という願いをかなえるために、私たち一人ひとりに何ができるのか、市民の皆様とともに考え、着実に歩みを進めてまいりたいと考えております。

一人でも多くの市民の皆様がこの冊子を読まれることで、戦争と平和、命の尊さについて考えていただける機会となることを願っています。

令和 4 年（2022 年） 3 月

宝塚市長

山崎晴恵

目 次

1 令和3年度「平和を願う市民のつどい」記録	-----	1
------------------------	-------	---

第1部 演奏

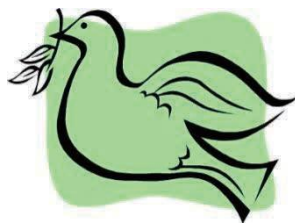
風と雲

第2部 講演会

「写真が語るいのちのバトンリレー ～被災地、紛争地、在宅看取りの現場に想う～」

國森 康弘さん

2 非核平和都市宣言文	-----	8
-------------	-------	---



平和を願う市民のつどい

と き 令和3年（2021年）10月29日（金）午後1時30分開演

ところ 宝塚市立西公民館

第1部 風と雲による演奏



曲目

- ・喫茶店の片隅で
- ・大空と大地の中で
- ・ふるさとのはなししよう
- ・故郷（ふるさと）

第2部 講演会

1 講師

國森 康弘さん（写真家、ジャーナリスト）

2 講演テーマ

「写真が語るいのちのバトンリレー ～被災地、紛争地、在宅看取りの現場に想う～」

3 講師プロフィール



國森 康弘

写真家、ジャーナリスト。京都大経済学研究科修士号、英カーディフ大ジャーナリズム学部修士号。新聞記者を経てイラク戦争を機に独立。紛争地や経済困窮地域を回り、国内では戦争体験者や野宿労働者、東日本大震災被災者たちの取材を重ねてきた。命の有限性と継承性がテーマ。

近年では、看取り、在宅医療、地域包括ケアの撮影にも力を入れている。

最新刊に『写真と言葉で刻む 生老病死 そして生』（農文協）。ほか、写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』（農文協、全12巻）の第1巻で2012年度けんぶち絵本の里大賞。他の著書に『ご飯が食べられなくなったらどうしますか？』（農文協、花戸貴司医師との共著、2017年生協総研賞受賞）、『アンネのバラ～40年間つないできた平和のバトン』（講談社）、『家族を看取る』（平凡社）など。

2011年上野彦馬賞グランプリ、コミカミノルタ・フォトプレミオ2010、ナショナルジオグラフィック国際写真コンテスト2009日本版優秀賞など受賞。

NHKの「おはよう日本」「ハートネットTV」「ラジオ深夜便」、TBS「Nスタ」などに出演。放送倫理・番組向上機構（BPO）放送人権委員会委員。

4 講演の記録（要約）

○東日本大震災の話

10年前、今暮らしている滋賀県で地域医療、在宅看取りを取材していた國森さんは寝たきりのおじいちゃんの部屋のつけっぱなしのテレビで東日本大震災の発生を知る。そこから自宅に戻り車で東北へ向かった。あまりにも被害が大きすぎる状況を目の当たりにして、東北という土地に関わっていかないといけないと思うようになった。2万人近い人が亡くなった悲しみの土地、一人一人に名前があって、家族がいて、歴史があった。その地で今日という日を亡くなった人の分も大事に生きて、またこの地で次の世代に命をつないでいく。そんな一生懸命に生きる人たちの姿が東北にはあった。

○南相馬市の青年の話

青年には好きな人と結婚して子どもを2人授かり、その子どもとキャッチボールをするという夢があった。

しかし、青年は20代前半のときに骨肉腫というがんが見つかり、病気と闘ったが完全にがんを取り除くことは出来なかった。それでも、夢に向かって、コツコツと貯金を貯めていた。

しかし、青年のがんは体中に回り、キャッチボールをするという夢は諦めて、今できることは何だろうと考えたときに、あとに残る母のために笑顔の写真を残しておきたいと思い、少しずつ青年と家族の写真を撮りためていった。しかし、ある日青年は亡くなった。最後の手紙には親より先に死ぬことへの無念と、これまでコツコツと貯めていた貯金を母のために残したという内容だった。ただ亡くなる前に一つだけまとまったお金を使っていたのが、自分でデザインしたお墓だった。“夢”と“希望”と刻んだお墓を自分が亡くなる前に建てて、そして今はそのお墓の下にその骨が眠っている。

亡くなる前の日に撮った笑顔の写真は今でもお母さんのそばに飾られている。

○仙台市の女性の話

女性はALS（筋萎縮性側索硬化症）という全身が段々と動かなくなって寝たきりになり、やがては呼吸さえもできなくなっていく進行性の難病を発症していた。ALS患者は自分で呼吸が出来なくなったときに人工呼吸器をつけるか、つけないか選択を迫られる。女性には2人の娘さんがおり、迷惑をかけないために人工呼吸器をつけない選択をしようとしていたが、娘さんたちの説得により人工呼吸器をつけて生きていくために模索し始めた。ほとんど動けない状態になっても少し動く右手で手紙を書き地元の新聞社に送った。内容は娘たちの将来を介護で犠牲にすることはできないが生きていきたいので力を貸してほしいという内容だった。するとそれが地元の新聞紙に載り、いろんな人たちが手を挙げてくれ、地元の専門職のほか、学生たちがグループを立ち上げ、既存の制度だけでは埋めきれなかった空白の時間帯を埋めて、24時間365日家族以外の誰かが常にそばにいる体制が整った。

1人目の娘さんには子どもが生まれ、女性はおばあちゃんになり、2人目の娘さんの結婚式には車い

すでお祝いに駆けつけることが出来た。しかし、ALS という病気は徐々に進行して、もういつ亡くなってもおかしくないという状況で手術をした。そして、色んな人の力を借りて女性はもう一度家に戻ってこることが出来て、9 日間を我が家で過ごすことが出来た。

学生たちが作ったサークルは女性が亡くなるまでに、7 代続いていた。その卒業生たちは養護教諭になったり、保健師になったり、看護師になったりいろんな専門職になっている。その卒業生たちはお別れの時に口々に「私たちを育ててくれた一番の先生でした。」と言っていた。今でも年に 1 回や 2 回、みんなで女性の家に集まって、自分たちの家族が増えてそんな中で、女性の教え子たちが今もつながりを大事にしながら、教えを大事にしながら各地で活躍している。

○小学生の女の子の話

女の子の住んでいる町は津波に飲まれたが、女の子の家は小高い丘の一番上の方にあっただので、そこまでは津波は到達せず無事だった。ただ、そのころからよく体調を崩すようになった。いろいろとお医者さんに診てもらったが、原因はよくわからず震災のストレスかもしれないと胃薬をもらったり、点滴をうってもらったりしていた。そんな状態で 6 月に入ったが、体調がよくならず悪くなっていた。見かねたお母さんやおばあちゃんが一番大きな病院で頭からつま先まで検査をしてもらおうと、頭にがんが見つかった。そして、そのまま手術をして入院して抗がん剤治療をして病気と闘った。でも、クリスマスになるころにお医者さんから、いまの医療技術では手の施しようがなく、残された時間はあまり長くないと告げられる。女の子は病院に通う代わりにお医者さんが家まで訪問診療をしてもらい、おうちに帰ってきた。そのころお医者さんは、2 週間持たないかもしれないと言っていたが、その一方で女の子は家族や看護師さんと話し合っ、1 カ月半後に家族みんなでディズニーランドへ家族旅行に行くという目標を立てた。

そして、1 か月半後に家族でディズニーランドへ家族旅行に行くことが出来た。ただ、女の子はゲートをくぐると脈が弱まっていった。救護室に運ばれて、家族はもしかしたらこのまま息を引き取るかもしれないと思ったときに、救護室に女の子が一番好きなミニーマウスが顔を出した。ミニーマウスが入ってきて握手してハグをして、そして写真をたくさん撮った。しばらく一緒に過ごしてからさよならをすると、女の子の脈は上がっていった。そして、ミニーマウスから生きる力を少しもらって、女の子の家族旅行が終わった。女の子はその次の次の日におうちで息を引き取った。

女の子には友達が大勢いて、友達も女の子の乗っている乗り物を世界一かわいい乗り物にしようとシールを貼ったり、メッセージを書いたり手紙を入れたり工夫をしていた。そして女の子に触れながら、ここまで自分の命を一生懸命生きてきた証しを自分たちの胸に刻んでいた。いまでも、時々、お墓参りとおうちに行かせてもらっている。おうちには、女の子の絵が飾られていて玄関を開けると女の子の写真がたくさん出迎えてくれる。

○滋賀県東近江市の話

女の子とお父さん、お母さん、おばあちゃん、さらにはひいおばあちゃんの4世代で暮らしているご家庭に出会った。ひいおばあちゃんは年を重ねる中で、認知症が深まっていった。物忘れがいろいろあって家族の名前も忘れていった。しかし、亡くなる1週間くらい前に「これはもう使わない。」と自分で入れ歯を外した。それまで何とか、食事をしていたおばあちゃんが、入れ歯を自分で外してからは一切口にモノを入れなくなり、ただ布団の上で静かに眠るようになった。その姿を見てご家族は「ボケてはるけど、自分の旅立つ時期は自分で分かってはるのかもしれない。」と家族が自分のおばあちゃんを見送る覚悟を決めるきっかけを与えてくれているような気がした。その何時間か後におばあちゃんの息がスッと止まり、家族はおばあちゃんの顔を見て「穏やかな顔をしているな。」と言ひ、そしてしばらくおばあちゃんを囲んで、お医者さんに連絡をした。その後、お医者さんがおばあちゃんの息が止まっていることを確認して、看護師さんが優しくおばあちゃんにお化粧をしてくれた。そんな看取りの輪の中にひ孫の女の子がいた。その女の子におばあちゃんとお別れの時について、何年か前に話を聞くと、「おばあちゃんが亡くなっていく姿は悲しくて寂しいことだけど、表情がすごく優しくかったので怖くなかった、感謝の気持ちでいっぱいです。」と語ってくれた。女の子が通っていた学校で、あるアンケートがあった。

「人は死んだらどうなると思いますか、生き返ると思いますか。命がリセットできると思いますか。」その質問に対して、女の子は「人は死んでしまうと、とても冷たくなって、2度と生き返りません。でも、私のおおばあちゃんは私の中に生きています。」と答えた。

○滋賀県東近江市永源寺地域君ヶ畑の話

君ヶ畑という集落で一人暮らしをしているおばあちゃんに出会った。おばあちゃんは認知症が深まっており、なぜ一人暮らしが出来るのか不思議だと思っていたが、だんだんとわかってきた。それは、色々な人たちとの寄り添いや関わりがあるからだとわかってきた。

ドクターが月に2回訪問診療してくれたり、ヘルパーさんが毎日の生活の手伝いをしてくれて、ケアマネジャーさんも来てくれていたり、土日には娘さんや息子さんが食べ物をもって孫やひ孫を連れておばあちゃんのところへ遊びに来てくれる。そして、なによりご近所さんやお友達が毎日来て家に上がって、何時間もおばあちゃんの話し相手になってくれる。毎日見ているので、調子が悪そうな場合は、ご近所さんたちが看護師さんたちに連絡してくれる。そんな色々な人の寄り添いや関わり合いがあって初めて一人暮らしがまわっていた。おばあちゃんは最後まで君ヶ畑にいたいと言っていた。しかし、だんだんと寝たきりになっていくことで、娘さんから心配だから私の家に来てほしいとお願いをされ、おばあちゃんは娘さんの家に行った。ほとんどベッドで寝たきりだったが、トイレの時だけは自分で行きたいと夜中に一人でトイレに行こうとしたときに転び、頭を7針縫った。お孫さんやひ孫さんがお見舞いに来て声をかけても目をつぶって返事をしないが、君ヶ畑という名前がでると、なにか一生懸命に伝え

ようとしていた。娘さんが君ヶ畑に帰りたいのかと聞くとおばあちゃんは一生懸命に帰りたいと返事をした。そして、おばあちゃんは君ヶ畑に帰ってきた。隣で大切な人に寄り添われながら、5日間を過ごした。

私が、おばあちゃんの息子さんと他愛もない世間話をしていると、息子さんが途中で言葉を飲み込んで、おばあちゃんの部屋に入っていった。すると、おばあちゃんの息がちょうど止まる瞬間だった。息子さんがおばあちゃんの息が止まったことを伝えると、家の裏手から娘さんも駆けつけてきた。そして、おばあちゃんの手を握って、おばあちゃんと呼ぶと、その呼びかけに戻ってきてこたえるかのようにゆっくりとおばあちゃんは息をし始めた。それを確認した娘さんはゆっくり眠っていいよと声をかけるとおばあちゃんは安心したかのように間もなくして完全に息を終えた。この時のことを、後々になって娘さんは寂しかったけどなにか温かいものをおばあちゃんからもらった気がする、温かい満足感というのかな、と振り返っていた。亡くなったおばあちゃん目から少し涙がこぼれていた。このおばあちゃんの亡くなってからの涙と息の吹き返しは家族にとって一生胸に残るおばあちゃんからの大切な贈り物になった。

○永源寺診療所のドクターの話

永源寺診療所のドクターは午前中と夕方は診療所の外来にいて、昼間は訪問診療をしている。老人ホームにも訪問診療に行く。亡くなった人のところにはお線香をあげに、地元の小学校には1学年ずつ命の授業を毎年している。さらには、絵本の読み語りボランティアにも入って、毎週子どもたちに絵本を読んでいる。お茶のシーズンになるとお茶畑に、風船バレーの応援に、地元の少年野球、消防団員に、PTA 会長に、医者だけど、医療以外にもいろんなことをしている。なぜかというとなら医者1人に出ることは限られているからです。誰もが望めば最後まで住み慣れた場所で、自分の望む場所で、自分らしく胸を張って生きていて、大切な人に寄り添われながら別れや感謝を交わしながら見送られる、安心して命が全うできる地域。そんな地域は医者1人には出来ない。だから、こうして色んな人たちとつながっている。東近江市の医療圏では、月に1回勉強会をしている。もう少し狭い永源寺地域でも月に1回勉強会をして、そこには医師や看護師やヘルパーはもちろんのこと、警察官や消防隊員、お寺のお坊さんや学校の先生、移動販売の人など様々な人が顔を出して、100人くらいで顔の見える関係を普段から築き上げている。それが、15年くらい続いている。そうすると、いろいろな数字に変化が現れてくる。例えば、自宅で最後まで過ごして亡くなる人は全国平均で1割ちょっとだが、永源寺地域においては5割。これは、ひとつにはこうした地域の住人や専門職の連携があるからです。

ときどき全国の講演会場で、「うちは都会だからそんなことはできない。」とか「うちは人のつながりが薄いから難しいよ。」とか「そんな医者はいない。」とか言われることがある。でも、永源寺地域も15年かけてこうしてきた。地域の都会とか田舎とかは関係ないと診療所のドクターは言っている。実際にどうなのか、大都会の東京にも通った。

○東京のホームホスピスの話

東京の閑静な住宅街にある、「ホームホスピス 櫟（ゆずりは）」というところに何度も何度も通わせてもらった。

ホームホスピスとは2004年に、宮崎市で暮らしていたおじいちゃんとおばあちゃんが、自分では暮らし続けるのが無理になったけど、ここで暮らし続けたい、そんなお年寄りのために「ホームホスピス かあさんの家」というものができて、それが始まりだった。ここで暮らした他のお年寄りが5人まであるいは6人まで一緒に暮らすのに、24時間365日ヘルパーさんたち介護職員さんが常駐する。そして、お医者さんが訪問診療をしに来てくれて、看護師さんも訪問看護に来てくれる、それがもう一つの終の棲家として2004年に始まって、この理念に共感した場所が全国70か所くらいに広がっている。そのうちのひとつが東京の「ホームホスピス 櫟」です。ホームホスピスというのはホーム、おうちなので、ご家族は好きな時に好きなだけ会いに来られるし、泊まりたかったら泊まりに来れる。自分の部屋でご飯を食べたかったら自分の部屋でご飯を食べられる。みんなで鍋をつつくこともある。戦争時代の苦しかった時の話をみんなで語り合ったり、若い世代に自分たちの教訓を伝えたり、そして80年、60年、90年と別々に暮らしていた人が一つ同じ屋根の下で暮らすということは、もちろん最初はぎくしゃくしたりすることもあるが、だんだんと同じ釜の飯を食う中で、なくてはならない存在になっていく。それは、ご本人同士だけでなく、家族たちも垣根を超えて悩みや喜びを分かち合う、緩やかで大きなつながり、ファミリーのようなものが生まれてくる。入居者と家族とスタッフさらには、ここでお父さんやお母さんを看取ったご家族の方たちがこの櫟で働いたりボランティアをしたり、パーティーに顔を出したり、そんな緩やかで血縁を超えた大きなファミリーのつながりが出来上がっていった。

ある女性はがんで櫟に入ってきた。人の世話をするのが大好きで、別の女性が食事を終えて食後の薬を飲もうとしているところに、自分のご飯を食べさそうとしてけんかになり、最初はギクシャクしていた。しかし、何か月か経つ中で自分の体と心に宿した痛み、つらさを共有していく中で娘さんには打ち明けられないような、家族にも言っていないような話を2人で打ち明け合う、そんな姿が見られるようになった。女性は最初に櫟に来た時、家を追い出されたと思いきやごく嫌だったが、今はあなたに会えたので本当に櫟に来てよかったと語り合っていた。女性のがんが、どんどんと深まっていき、女性が旅立とうというときにもう一人の女性がそばにいて手を握って、「ありがとう、またね、また会いましょうね。」そんな声をかけて女性の旅立ちを見送った。東京でも、大都会でも、人のつながりが薄いと言われている場所でも、自分たちでつながりを作って血縁を超えてみんなで別れや感謝を交わして命を全うする、その姿を看取っていく。そんな営みが東京にもあった。

非核平和都市宣言

青くすみきった空、清らかな武庫川の流れ、緑あふれる六甲・長尾の山々……。この素晴らしい自然と明るくおだやかな暮らしは宝塚市民すべての願いです。

このような私たちの願いに反し、世界では依然として、人類同士の悲しむべき争いが絶えず、しかも地球上の全生命を滅ぼすことのできる核兵器が蓄積されてきました。

しかし、人類の平和への切実な願いが全世界に高まり、大きなうねりとなって、ようやく戦略核兵器の縮小や、各地域の紛争解決への明るい兆しが見えようとしています。

私たちは、このようなときにこそ、戦争を、そして核兵器をなくし、世界の恒久平和を強く願わずにはられません。

ここに、宝塚市は憲法の平和精神に基づき、恐るべき核兵器の廃絶を願い、永遠の平和社会を築くことを誓い、「非核平和都市」とすることを宣言します。

平成元年（1989年）3月7日

宝 塚 市





宝塚市平和モニュメント「火の鳥」

いま、語りつぐ 平和への願い XVII

令和4年（2022年）3月発行

編集・発行 宝塚市総務部人権平和室人権男女共同参画課

宝塚市東洋町1-1 電話 0797-71-1141（代表）